

令和8年6月15日

「可能性」と「潜在性」

哲学者の河野哲也氏が、著書の中で「可能性(possibility)」と「潜在性(potentiality)」について考察していました。河野氏によれば、子どもの可能性とは、何かに「なる」、何かが「できる」ようになるということであり、簡単に言えば、「ある能力を獲得する」ことです。

一方、「潜在性」とは顕在性の反対であり、それは子どもの文脈では、いまだ何らかの特定の能力が獲得できていないが、いかなる能力にも自分を特化しうる…という意味だそうです。

つまり「潜在性」は、自分が別のあり方をした姿に変容しうるということに焦点を置いており、個人の「存在の変容」に着目するものだと考えます。

これまでの日本の学校教育は、どちらかといえば「可能性」を追求する教育に重点を置いていたと思っています。親や教師は競って、子どもにさまざまな能力＝可能性をできる限り身に付けさせようとする、人間とは社会によって認められる働きによってこそ、十全に人間になるという考え方であり、「社会が人間をつくる」という発想に立つものです。

しかしこうした考えの下では、人間はその社会の中での役割やそれに応じた能力に縛られてしまい、そこにしか自分の存在意義を見出せなくなっていくのではないのでしょうか？河野氏は、これを「生命としての人間の喪失」と指摘しています。

子どもがしばしば「大人になりたくない…」と言うのは、大人が社会に拘束され、限局化された存在に見えてしまうからかもしれません。「潜在性」こそが、人間を人間たらしめているのではないだろうか…と河野氏は考察しています。

学校教育に閉塞性をもたらしているものの一つに、こうした教育観が根強く影響しているという指摘に私も同じ思いを抱いています。子どもは大人になるために途上の存在であり、何かに「なる」ことを強いられること、何かが「できる」ようになることを期待され続けることは、子どもたちにとって果たして幸せにつながるのでしょうか？

一人一人の子どもが今を生きていることを認め、個々の存在として「ある」ことを生命と捉えることによって、社会に埋め込まれた個人という存在の問い直しを、これからの私たちは行っていく必要があるのではないのでしょうか。最後に河野氏の言葉を引用します。

『教育とは、現在の社会への同化ではなく、生命の再創造なのである』